

日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価（平成29（2017）年度採択課題）書面評価結果

日本側拠点機関名 東北大学大学院農学研究科（教授・高橋 英樹）
研究交流課題名 食の安全性の飛躍的向上を目指した農免疫国際研究拠点形成

評価結果（総合的評価）

- | | |
|----------------------------------|--|
| <input type="radio"/> | A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。 |
| <input checked="" type="radio"/> | B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。 |
| <input type="radio"/> | C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。 |
| <input type="radio"/> | D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

本課題は、食の安全性の飛躍的向上に資する新たな農免疫国際研究拠点形成を最終目標としており、家畜、水産生物から農作物を対象とする横断的な研究を通して食品の安全・質の新評価技術を提示しようとするものである。

世界的水準の研究交流拠点の構築の面からは、研究活動の多くが既存の国際共同研究をベースにしたものが多いと思われるが、全体的には想定どおりの成果をあげつつある。

若手研究者育成への貢献においては、交流相手国との研究ネットワークの構築で国際研究交流拠点を意識した積極的な研究活動が実施されたことは特筆すべき点であるといえる。

今後の研究交流活動計画では、「動植物の比較免疫研究」や「家畜の腸内細菌と作物の根圏・葉面細菌のマイクロバイオームと自然免疫との関わりに関する研究」など、融合研究が新たに開始されている。これらは、斬新でオリジナリティーのある内容を含んでおり、今世紀、持続可能な食料生産を実現する上で避けて通れない課題である。国際研究交流拠点の完成へ向かってさらに進めてもらいたい。一方で、「国内での研究・教育活動」が十分ではない。また、ネットワーク形成は交流相手国に偏りがあり、特に中国に関しては派遣された人数が著しく少ない。今後の活動にて解決されることが期待される。